

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【虚構からの訣別を図るべき時期に到達したJR東日本！ シリーズ10】

## したたかな大塚人事！ その

大塚陸毅・JR東日本社長（執筆当時、以下同じ）に関しては、評者の立場によってさまざまな評価があるようだ。一般的評価としては、何事につけても“慎重”、これを良く言えば「用心深い」、悪く言えば「石橋を叩いても渡らない」といったところが大方のようである。・・・松崎氏との距離関係の見えにくさや、「JR東日本革マル問題」の解決に無為、あたかも放置、先送りしているかのように見えることについて安易に批判する向きも内外に少なくないが、重大な関心を抱いて「大塚社長体制」を凝視してきた者として、それは必ずしも当を得ていないように思われる。

私は問われて、冗談交じりにJR革マル派完全支配下の東労組を「イラク」、松崎氏を「フセイン」に例えて、バグダッドに要塞を築き、スカッドミサイルを装備した親衛隊に何重にもガードされているのだから、「革マル排除につき、“箱根の西”で成功したのだから東で出来ないはずがない、と口で言うのは簡単だが、そんなものではない」とマスコミ関係者などに説明することがある。ひと言でいうと、私の大塚社長評は、「人事の巧みさ」と「したたかさ」に尽きる。そして同社長の最大の特徴である“慎重”な性格は、「住田・松崎・柴田体制」とか「松田・松崎・花崎体制」などの評語が生まれなかったことからしても、それなりに効を奏していることがうかがえる。

実際、「大塚陸毅社長」は、簡単に誕生した訳ではない。当時の状況を思い出して幾つかのエピソードを綴ってみよう。まず、第一の伏線として、平成10年の9月頃、**松崎氏はJR東労組東京地本執行委員会の場に顔を出し、「松田の後の社長は大塚ではなく、原山がなるだろう。JR東日本の次期体制は原山社長、花崎副社長コンビだ」という趣旨の発言をしたという事実がある。**執行委員会の場で実際にこれを耳にした複数の人物が、「ポスト松田のJR東日本は、原山暫定政権、花崎本格政権と続いていくのだな」と直感した、とその時の感触を述べている。そしてこの「重大情報」は、執行委員会終了後いくばくの間もなく、大塚社長待望グループにも伝わった模様だ。原山氏は技術系を代表する副社長で、松崎氏と縁の深い「旧国鉄運輸局」系統の人物である。事務系の大塚社長待望グループに衝撃が走ったであろうことは想像に難くない。その後、「長期債務処理法案」の際の松田社長の異常なほどの突出した政府への“反抗”ぶりとその挫折など、紆余曲折を経て、**JR東日本経営トップ人事が煮詰まってきた当時、あまりにも露骨、松崎色見え見えな「原山社長、花崎副社長」案はどうやら消え、「松田社長続投、花崎副社長」案と「大塚副社長 社長昇格」案との競合、という状況になったようだ。**「松田続投決定」のガセネタ情報まで実際に流され、一時は予断を許さなかった両者の攻防の結果は、「大塚陸毅社長」の誕生に終わった。そして「松崎氏とのパイプ役」と目されて権勢を振るった花崎常務はJR東日本本体から離れ、有力関連会社社長に転出した。